AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 () 平成18年度:57-58.

思春期がん患者の「病気になった自分」についての思い

嶋田, あすみ ; 森, 浩美

# 思春期がん患者の「病気になった自分」についての思い

４階西ナースステーション　　〇嶋田あすみ、森　　浩美

**【はじめに】**

思春期に病気になるということは、過去との連続性を断ち切るような出来事と言える。私達は、長期入院生活で様々な葛藤に揺れ動く患者と接している。そこで今回、揺れ動く思春期にあるがん患者を対象に面接調査を行ったので報告する。

**【研究目的】**

思春期がん患者の「病気になった自分」についての思いを明らかにする。

**【研究方法】**

対象は北海道内大学病院において治療中の患者で、調査方法は半構成的面接法を用いた。面接内容は「病気になった自分」についてである。本人および保護者に同意を得て面接内容をテープに録音した。期間は 2005 年 11 月～ 12 月の約 2 ヶ月間である。

**【分析方法】**

テープ録音の内容を逐語化し、データを文脈に応じて意味内容を損なわないように単文を 1 記述単位としてコード化した。次に、コードを比較検討し、類似性のあるものをサブカテゴリー化、さらに再編を繰り返しながらカテゴリーを抽出した。

**【倫理的配慮】**

対象者と保護者に研究の主旨を文章と口頭で説明し、同意を得た。途中での協力中止は自由であること、面接内容は個人が特定されず秘密厳守が保障されることを説明した。面接の途中で患者が精神的不安定を示した場合は、原則として面接を中断し、本人・保護者・医師とその後の対応について検討する。

**【結果】**

対象者 10 名に研究協力を依頼し、男性 4 名女性 2 名の同意が得られた。通院中の者 5 名入院中の者 1 名で、年齢は 12 ～ 19 歳、平均 15.7 歳である。初発年齢は 9 ～ 15 歳、平均 13.5 歳であった。面接時間は 1 人 30 ～ 60 分で平均 47 分であった。分析の結果、全コード 138、17 サブカテゴリー、6 カテゴリーが抽出された（表１）。［病気・予後に対する不安・恐れ］は、サブカテゴリー（病気の行く末を思う恐れ）（病気・治療に関する不安・心配）から、［病気と生活］は、（病気・将来に対する思い）（病気･治療が生活に及ぼす影響）（退屈な入院生活）（体調の変化）から、［取り残される孤独感］は、（健康な友達に抱く心情）（病気後の友達関係）から、［病気・治療に対する複雑な感情］は、（病気の受け止め）（前向きになれない自分）（治療･病気に対する率直な感情）から、［病気と人間関係］は、（病気になった後も続く良い友達関係）（同室者等との人間関係）（家族を思う気持ち）から 、［病気体験と成長発達］は、（前向きな自分）（自分を励ます生き方）（物の見方の変化）から抽出された。

**【考察】**

入院当初、思春期がん患者は病気の行く末に対する恐れや治療に対して、心配な思いでいることが確認できた。さらに食事が唯一の楽しみといった退屈な入院生活、学校に行けない入院生活を通して、受験への心配など病気・治療がこれまでの生活を一変させたことを実感している。 思春期は、進学や職業選択など将来の生活に向けて動き始める重要な時期であり、病気・入院が患者の将来へ及ぼす影響は大きい。また患者は友達から取り残される孤独感を抱いていた。長期入院による閉鎖された環境や治療による副作用、学業の遅れなどが孤独感の要因となっていることが推測される。仁尾らは[1]「思春期は自我同一性の確立という発達課題に取り組むことや、両親以外に友人が重要他者になることから、友人や社会との交流が阻害されることに孤独と焦りを感じる」と述べている。

一方、病気になったのは良い経験、他人に優しくなったなど、物の見方の変化や前向きな自分を発見し、病気体験を通して成長した自己を感じていた。仁尾らは[2]「思春期は、他者と比較しての相対的な評価を行なうという発達段階の特徴から、－中略－自分と同じ、あるいはそれ以上の境遇や悩みを抱えている人がいることを知ることにより、『自分だけではない』という思いを抱いたり、安心感を得ている」と述べている。

以上、思春期がん患者は揺れ動く思いの中で、必ずし

も否定的な思いばかりではなく、病気体験をプラス体験として捉えていることが示唆された。今後は、日々の看護の中で、その揺れ動く思いを十分に表現できるような人間関係を構築しながら、どのような思いでいるのかを見極め、個々の患者にあった支持的な看護を展開して行きたい。

**〈引用文献〉**


1）仁尾かおり他：先天性心疾患をもつ思春期の子どもの病気認知，小児保健研究，62(5)，p549，2003.

2）仁尾かおり他：先天性心疾患をもつ思春期・青年期の患者に関する文献の概観，国立看護大学校研究紀要，3(1)，p14，2004.


表１．思春期がん患者の「病気になった自分」についての思い

| カテゴリー | サブカテゴリー | コード（一部抜粋） |
|---|---|---|
| １．病気・予後に対する不安・恐れ | 病気の行く末を思う<br>病気・治療に関する不安・心配 | 死を考えた<br>再発の予感はあった<br>病気のことは聴きたいとも思わなかった<br>病気のことで頭がいっぱい |
| 2. 病気と生活 | 病気と将来に対する考え<br>病気・治療生活に及ぼす影響<br>退屈な入院生活<br>体調の変化 | 受験が心配<br>病気になって激しく動けない<br>好きな学校に行けない<br>これ以上の治療はしたくない<br>飯しか楽しみがない<br>入院生活は暇<br>日に日に体力の回復を実感する |
| 3. 取り残される孤独感 | 健康な友達に抱く心情<br>病気後の友達関係 | 友達との差を実感する<br>友達に忘れられてしまうと思うことはある<br>友達の話は切ない<br>友達には理解してもらいたい<br>友達関係が狭くなった |
| 4. 病気・治療に対する複雑な感情 | 病気の受け止め<br>前向きになれない自分<br>治療・病気に対する率直な感情 | 病気になったのは不運だ<br>どうして私なのかと思う<br>病名を聴いて驚いた<br>病気になるとは思わない<br>嫌なことからは逃げたい<br>何事もやる気がおきない<br>治療はやれって言われたからやった<br>治療するかどうかを選ぶ権利を感じてなかった<br>考えても仕方がない |
| 5. 病気と人間関係 | 病気になった後も続く良い友達関係<br>友達以外の人間関係<br>家族を思う気持ち | 友達が手紙やメールをくれていい人だと思った<br>みんなが笑わせてくれたから乗り越えられた<br>同室者とは話をしようとは思わなかった<br>家族の絆は深まった<br>親へ負担をかけたくない<br>家族は自分を心配しているのかと疑問に思う |
| 6. 病気体験と成長発達 | 前向きな自分<br>自分を励ます生き方<br>物の見方の変化 | 自分は頑張ったと思う<br>治療しないと病気は治らない<br>前向きにならないと損<br>落ち込んでも得しない<br>将来を決めるのは自分次第<br>辛いのは私だけじゃないと思う<br>病気になったのは良い経験だった<br>治療が出来ることは恵まれている<br>他人に優しくなれた |